



「その他のサービス業」からひとこと

糸乗 貞喜

(アルバックニューズレター 1986.3)

- 4 コンサルタント論

その他パンザイ

「わかった」とか「わからぬ」などという言葉の漢字に解という字をあてたり、分という字をあてたりしていることがある。正しくは「分かる」であるが、なぜ分けるという字を使うのか不思議に思ったことがある。考えてみると「わかる」ことは分解したり、分類したり、仕分けしたりすることと密接につながっている。

そういうことを感じていたら、面白い本があった。それは「“分ける”こと“分かる”こと」という本(坂本賢三著、講談社現代新書)である。この本を読みながら感じた、われわれの職業観などを、本の解題をかねて書いてみる。

「その他パンザイ」という気分を感じたのが、この本の読んだ一番の効用だったように思う。もう数年も前に読んだ本で、細部は記憶していないが、何か気にかかり続けている本でもあったので、ここに書いてみたくなった。

この本の内容については、題によって十分表わされているので、紹介の必要はないと思う。とにかく親切な本で、「とくにお急ぎの方は、おしまいの五章を読んでください」と書いてある。そして3項目の教訓として整理されているので、一応紹介しておく。「教訓その1 分類は認識や行動のために人間がつくった枠組であって、存在そのものの区別ではない。教訓その2 分類をつくる際には必ず、『その他』や『雑』の項目をおいておくことが有用である。教訓その3 『わかる』とは、その分類体系がわかるということであり、『わかり合う』とは、相互に相手の分類の仕方がわかり合うことである」

新しいアイデアはその他から

つまりこの本は、「わかる」ために「分ける」ことがどれだけ有効かということ。「ことを分けて」古今の蘊蓄を傾けて書かれているので、一読をおすすめする次第だが、少し私の感想を述べさ

せていただく。「新しいアイデアや芽は、たいてい『その他』や『雑』の部に含まれている」ということが本書の中にもあるが、私どものような商売をしていると、まずはじめは資料整理(=分類)から仕事を始め、いろいろな事象の変化をたどることになるが、まず気づくのは「その他」の増加である。商業統計を見ると「その他の小売業」の部分が大幅に増えている。家計調査年報を見ても、「雑費」が年々ふえている。工業統計も分類に困って、ついに変更をした……などとなっている。

「他に分類できないその他のサービス業」

考えてみると、人間の職業の歴史も同じような気がする。何万年前か何十万年前かは知らないが、全員が狩猟採集業だったり、農業だったりしたのだろうが、ある日突然、第3次産業就業者が発生する。この人は「世話係」とか「管理職」とか「王様」とか「酋長」とか呼ばれた。またある日には農器具づくりを専門にする人も現れた(第2次産業の発生)。

当時はまだ分類方法も進んでいなかったもので、農業など以外はすべて「その他」と分類されたにちがいない。そしてこの新職業の人たちの世話をする人は、さしずめ「その他のその他」ぐらいに分類されただろうと思う。

かくして職業はドンドン増えていき、ついには日によって、時間によって、相手によって呼ばれ方がちがう職業まで発生した。「シンクタンク」とか「ギョウシャ」とか「コンサル」とか呼ばれるもので、分類に困った末「他に分類されないその他のサービス業」などということに押し込まれる。まさに「その他のその他の世話係」みたいな感じがする。

われわれの仕事というのは、誠に説明しにくい。中学、高校などの同窓会があると実に困る。「市役所に勤めている」とか「銀行員」とか言えれば

いいが、「他に分類されないその他のサービス業」などといっても「わかる」わけがない。

結婚式で職業説明

こういう状況からまた新しい需要も発生する。わが事務所の所員が結婚するとき「ちょっと祝辞をお願いしたいんですが」「その時、会社の宣伝と仕事の説明を入れてほしいんですが」というようなことになる。つまりこの時は「その他のその他の説明業」という職業が発生したことになる。

この説明が至難の技で、息子が親に説明できないようなことを2～3分で親戚中に説明せよといっても、どだい無理というものと思う。かくして、「20年前この事務所をはじめた頃は、まさかこんなに増えるとは思っていませんでした。会社が発展するかどうかは新郎の君などの若い人たちが決めていくことですが、この仕事が発展することはまちがいありませんから、この職業に就職したという点では絶対にまちがいないと思いますから、御安心下さい」などと居直り発言で逃げることになる。

「分ける」と「まとめる」

蛇足ばかり長くなったが、もう一つお許しいただきたい。「まとめる能力が理解のために必要だ」ということを、なだいなだ（作家・精神科医）という人が書いている（日経新聞s60.10.14）。王様と歴史家がいて、ある国の歴史をまとめると命じられた歴史家が数冊にまとめた。長すぎて読めないといわれ、1冊に、その半分に、ついで1ページにしたがまだ長すぎる。ついに「

国は 年に起こり、 年に滅んだ」と1行にまとめたら「よく分った」といわれたという話が引用されている。そして医者も患者さんを診るとき、まとめるという態度が必要だといいながら、次のように書かれている。「医者をしていると、この病人は急いでいるのだから、短時間で診察を終え、大きな病気はない、と安心させるだけでい

い、というような判断が必要な場合もあるが、それをやるのも一種のまとめである」という態度は見事な診察態度である。しかしよく考えてみると、このまとめ方はまた見事な仕分けでもある。

実に奇妙なことだが、結局のところ「分ける」はまとめるの一種であり、「まとめる」は「分ける」の一種であるように思う。